（別紙２）

審査の結果の要旨

氏名　森　一郎

M･ハイデガーの死をめぐる考察との批判的な対論を基盤に、九鬼周造の偶然論の読解を踏まえ、H・アーレントの「誕生の哲学」に示唆を得た思索へと展開する本論文は、従来生の終わりとしての死に比し等閑に付されがちであった、始まりとしての誕生についての考察を、哲学史的に補完し体系的に深化しようとする、広い視野と創見に富む労作である。

序説「始まりへの存在」は、出生の偶然と不平等にまつわる『ミリンダ王の問い』と『ヨハネによる福音書』、それらにまつわる九鬼とアーレントの問題意識を確認しつつ、「生まれ出づる悩み」を克服しようとして、新生としての「第二の誕生」が求められる所以を明らかにする。

第一部「被投性・偶然性・出生性」は、ハイデガー、九鬼、アーレントそれぞれの根本概念とその連関を論ずる。

まず第一章「偶然のいたずら――九鬼」は、若き日のハイデガーと、その初志を受け継いだと思われる九鬼、両者によるアリストテレスの偶然論解釈を取り上げ、アウトマトン（自動）とテュケー（運）を積極的偶然として詳細に読み解く。その結果、被投性の掘り下げとしての偶然性の主題が、歴史的生起の動性への問いとして確認される。

第二章「生起・出会い・始まり――ハイデガー、九鬼、アーレント」は、現実的なものの根底に「無限にありそうもなかったこと」がひそんでいることを浮き彫りにする。

前半部（第一～三節）は、ハイデガーにおいて既に、出生と偶然をめぐる問いが萌していたことを確認する。しかし展開深化されずに終わったこの問題を、アーレントと九鬼がそれぞれ独自に引き継いだ経緯が明らかにされる。それを受けて、後半部（第四、五節、まとめ）では、相まみえることのなかったアーレントと九鬼の思索が、「出生の偶然」という共通テーマにおいて、落ち合うことを示そうとする。両者のそのような結び合わせから、何気ない現実性のうちにひそむ偶然性と奇蹟性が、ひいては〈いのち〉の孕む「おのずから」の自動性が、生まれ出づる者どものたまさかの出会いから生ずる、始まりの出来事性に即して、解き明かされてゆく。

第二部「死と誕生」は、ハイデガーとアーレントとともに「終わりと始まり」の思考を展開して、本書の中心部を形成する。

第一章「死すべき者ども――ハイデガー」は、死の実存論的概念が、戦争やテロルといった政治哲学的な問題次元へと通じていることを明らかにする。特にホッブズの自然状態論と交差させて、テロリズムを生んだ近代精神の系譜の一端を明らかにする。

第二章「生まれ出づる者ども――アーレント」は、前半部（第一～三節）で「アーレントと誕生の問題」を扱い、彼女の「誕生の哲学」の出発点であるアウグスティヌス解釈に光を当てる。始まりには第一の始まりとあらたな始まりという両義性が具わること、終わりと始まりは先駆と遡行という二重の志向において共属すること、始まりへの存在とは「始まりの記憶をもつ存在」であること、が示されてゆく。

本論全体を締めくくる後半部（第四～六節）は、「始まりとしての約束」をめぐって展開される。ギリシア悲劇『ヒッポリュトス』との対比において、旧約聖書のアブラハムによるイサク奉献物語を取り上げ、約束という行為がその複数性ゆえに孕む不如意性を暗示するものであるという読解を呈示する。そして約束と赦しにおいて輝き現われる、相互拘束と相互解放の共同実存的自由が、第二の誕生への存在としての人間に可能となることが展望されて、本論は閉じられるのである。

本論文は、古代の文献に関しては、哲学的考察に焦点を絞り過ぎて歴史学的な資料説との対応への顧慮を欠くなど瑕疵がないわけではないが、死に比し論じられることが少なかった誕生についての思索を、哲学史に補おうとする独創的な着眼点を持ち、その着眼を広汎な文献についての精細で新鮮な読解を積み重ねつつ、周到に展開した学的達成である。

それゆえ本審査委員会は、この論文が博士（文学）の授与に十分に値するとの結論に達した。